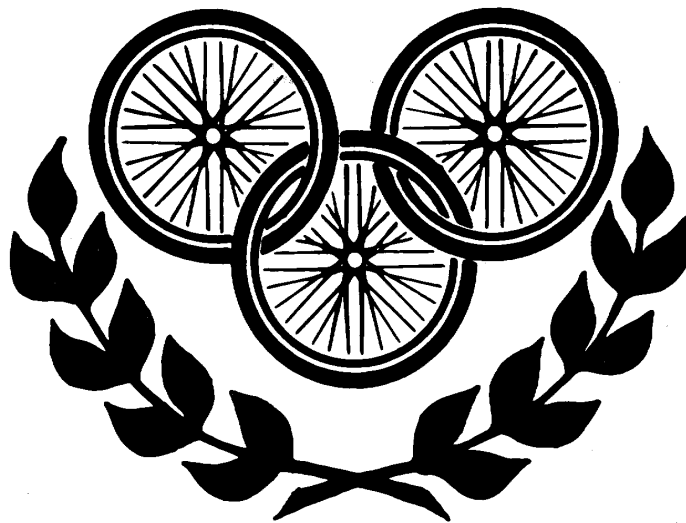


フェスピックゲーム第一回大会とそのデザインについて

*On the 1st Far Eastern and South Pacific Games for the Disabled
and the Created Designs in its System.*

大 蔵 善 雄



FESPIC

フェスピック シンボルデザイン

フェスピック第一回大会とそのデザイン

昭和48年の暮れの理事会で中村裕氏は一つの提案をした。

「10周年記念事業として、障害者国際スポーツ大会を開きたい」。

かなり前——それは1968年のエルサレム・パラリンピックのとき——に、こうした大会に東南アジアからの参加がないのは淋しいという話が出たらしい。それ以来、南太平洋地区を含む大会の開催は、グットマン博士以下関係者の一つの夢だった。そして中村氏は、そうした大会を開催するとすれば日本がリーダーシップをとらねばならないと考えていた。また、その大会はストークマンデビルの名にこだわることなく、出場選手を車椅子使用者に限らず全障害者に広げるべきだと考えた。この種の大会では、ストークマンデビルの伝統的競技規則に従うことが当然のように考えられていたため、脊損以外の障害者はとかく影が薄くなりがちである。代表選手として

海外に派遣されるものは、いつも車椅子に乗っている。太陽の家でも、選手を見送るものは「車椅子はいいなあ」という羨望の気持ちを抱いているはずだった。中村氏は何度かグットマン博士に全障害者の大会にするよう訴えたが、答えはいつも「時期尚早」であった。しかし、1972年のハイデルベルク・パラリンピックのとき、「日本でやってくれないだろうか」という声があった。その時日本側関係者のほとんどは、「そうは簡単にできませんよ」と答えた。

発展途上国が多い東南アジア諸国は、選手派遣の費用を出せるほど豊かではない。加えて、政情が安定しているとはいえない。十分な施設もないような国が、障害者のスポーツ大会になど乗ってくるわけがないというのが、ごく一般的常識的な考え方である。中村氏はオーストラリアを打診した。「ぜひやってくれ」という返事があった。

そこで1974年春、シンガポールで第一回の予備会議を開いた。オーストラリアとニュージーランドは非常に積極的だった。両国は福祉先進国だから当然である。

問題は、他の国がどのていど賛同するかであった。名称は Far Eastern and South Pacific Games for the Disabled (極東・南太平洋身体障害者スポーツ大会)を略して、“FESPIC”(フェスピック)とした。

招待国はオーストラリア、ニュージーランド、フィジー、ホンコン、インド、パキスタン、クメール共和国、ネパール、タイ、トンガ、マレーシア、ニューカレドニア、パプア・ニューギニア、バングラデシュ、中国、インドネシア、韓国、ナウル共和国、フィリピン、シンガポール、スリランカ、ベトナム共和国、ビルマ、ラオスの24カ国。

参加費用は、50年5月29日から6月5日までの滞在費を日本が負担。旅費は各国自弁という形である。このうち何カ国が参加するのか、はじめは見当もつかなかったが、半分が参加するとしても、到底、太陽の家の力だけでは招くことができない。10周年記念として企画したことだが、主催は日本身体障害者スポーツ協会と、大分県身体障害者体育協会に引き受けてもらった。

後援は厚生省、大分県、大分市、別府市である。

1974年の秋、秋山ちえ子氏と、身障スポーツ協会の氏家馨常務理事と中村裕氏が、第二回のシンガポール会議に出席し、インドネシア、フィリピン、インド、シンガポール、タイなどの参加が確定的になった。

それ以前に、中国には、スポーツ視察団が太陽の家に来たときに毛沢東首席と周恩来首相あての文書を依頼しておいたが、返事はなかった。

大会費は、国が1,500万円、大分県が1,000万円、大分市と別府市が各500万円、日本自転車振興会が2,900万円負擔してくれることになった。合計6,400万円である。

東京パラリンピックの予算は、選手・役員約380人、10日間の滞在で1億2,000万円だった。フェスピックは、選手・役員250人で8日間で6,400万円で台所は非常にきびしい。

そこで秋山ちえ子さんが中心になって、“発展途上国をフェスピックに参加させる会”をつくった。派遣費が出ない国へ旅費を送ってやろうという会である。企業やボランティアのグループから最終的に約2,500万円のお金が集まった。

貧しい国が参加してこそ意義がある。一カ国でも一人でも多く参加してほしい。パプア・ニューギニアは、「旅費その他の経済的責任を負え」といつてきた。ネパールは現地で診療所を開いている岩村医師などの手をわずらわせた。南ベトナムは戦争の終結で参加出来なくなった。

国内選手団の選考はあまり問題はなかったが、受け入れ体制づくりは大変であった。大会本部と外国選手宿舍



大会 ポスター

として、大分西鉄グランドホテルが決まった。

これは大分では、初めての国際的な催しである。

皇太子、妃殿下もおいでになることになった。県も市も総力をあげて準備に突入した。

私はこの大会の委員に選ばれすべてのデザインを担当した。第二回シンガポール会議に間にあうようにシンボルマークの制作、フェスピック大会ポスターの制作と大変な毎日が続いた。「車椅子にとらわれないでくれ」「聾啞者もいるし盲人もいる」「切断者もいる」その他色々条件が出され、まとめるのに悩まされた。痛々しきや暗さを出しては駄目である。かといってまともに描けば絵にならない。私は河野公記氏に依頼し、太陽の家の選手の色々なスナップを撮影してもらい構図を決定した。

シンボルマークのデザインは、車椅子に月桂樹をあしらったものに決めた。聾啞・盲関係の方に多少の反対があったことは致し方のないことであった。そのためフェスピック大会旗は極東南太平洋地区を隋円の中に配したものにした。これは第二回シンガポール会議後に決まったことであったため各国の委員会には書面で了承を求めた。このデザインは後に大会旗になり、大会参加章として関係者に配られた。特に参加章は七宝焼で作られたた



大会旗 デザイン

め外国選手間で大変喜ばれた。

シンボル旗・大会旗とも色彩は“青空と純白”をテーマにし、セルリアンブルーと白を基調にした。

大会では、この二つのデザインをすべてのものに印刷した。ポスター、金銀銅の優勝メダル、参加賞、シンボル旗、大会旗、インフォメーション関係の印刷物、ステッカー、ネームプレート、大会関係の印刷物等に使用した。

1975年6月1日午前10時—。

皇太子殿下、妃殿下のご着席とともに、メインボールをはさんでシンボル旗と参加各国旗が掲揚され、10発の煙火。そしてファンファーレが鳴りひびき、選手団が入場した。

オーストラリア、バングラデシュ、ビルマ、フィジー、ホンコン、インド、インドネシア、韓国、マレーシア、ネパール、ニュージーランド、パキスタン、バプア・ニューギニア、フィリピン、シンガポール、スリランカ、タイ、そして和歌山、茨城、千葉、長野、北九州、兵庫、山口、大分の日本選手団。

真夏といってよいほどの強い陽光の下。胸を張って行進する選手たち。スタンドを埋めた2万5,000人の大観衆が送る拍手は一つのリズムになって、フィールドにこだしました。

オレンジとブルーのフェスピック陽よけ帽が会場をうずめる。帽子にもシンボルマークがきれいにきざまれて

いる。

選手団が整列し、ファンファーレと煙火がダブリ、鼓隊の先導で大会旗が入場。東西両ゲートから、スリランカ選手と大分県立聾学校生徒が炬火を掲げて走り込む。

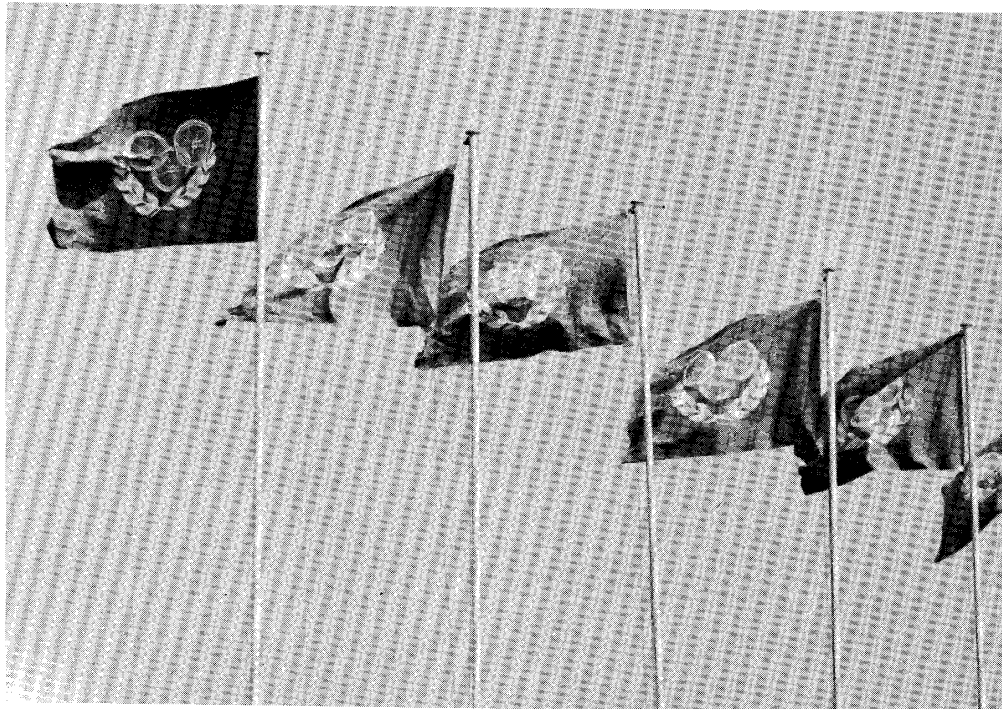
2人はメインスタンド前で交差し、炬火台で合流。火は一つになって燃え上がった。

そして、「若い力」の演奏とともに大会旗がメインボールにひるがえった。いまはじめて、東南アジアの発展途上国の身障者がスポーツの場に集まった。脊髄損傷者だけの車椅子の大会から、身障者全体の国際大会がいは始まった。

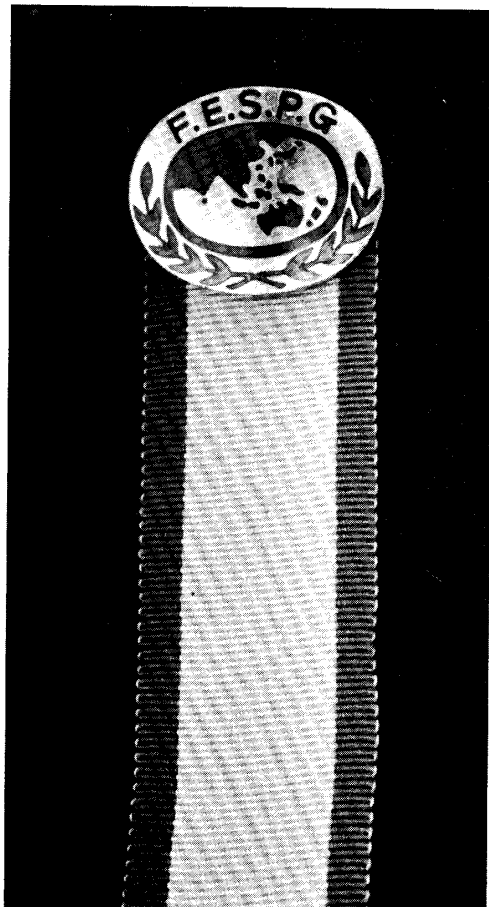
私のデザインが生きてこの会場に息づいていると思うと、燃えるような感動が胸を打った。

パラリンピックの創始者グットマン博士が手を握り、「ありがとう」と言われたとき私のそれまでのつらかった舞台裏の苦労は一ぺんに吹きとんでしまった。

大 蔵 善 雄



競技場にひるがえるシンボル旗



大会参加賞



優勝メダル（金・銀・銅）